
変態道中夢語り

城川 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態道中夢語り

【Zコード】

Z3976-I

【作者名】

城川 一三

【あらすじ】

変態で紳士の友人、阿武野に振り回される青年の周りにはなぜか
いつも異常が起こる。

そんな彼と彼の友人たちのファンタジーなお話。

プロローグ（前書き）

ああ、また発揮してしまいました。続きを書くより他の物を書いてしまうという駄目っぷり。しかも変態的。今回は正直変態を書きたかっただけです。

そんな僕を貶してください。そして広い心で許してください。

あ、因みにエロスはダメ、ゼッタイという人は、リターン推奨です。

プロローグ

「ひとえに美少女といえども様々なタイプが存在し、また人それぞれによつて美少女の物差しは違つ。たとえば僕は、活発で運動好きの健康的な子が好みであり、髪はショートからセミロングまでの長さがベストだと考えている。健康的な小麦色の肌、鍛えられた太腿、少し汗ばんだ腋、そして時折見える臍の絶妙なチラリズム。はからずとも悩ましげに釀し出されるエロティシズムに僕はリビドーを感じずには居られない・・・・・あ、スパッツも有りだと思つぞ。まあつまりスポーツ少女万歳という事だ」

「お前は早朝から何を言つてる」

「何つて、分からぬのか」

現在の時刻は朝の七時。教室には俺と目の前にいる自称紳士の阿武野 真流尚しか居ない。

そんなひつそりとした空間の中、何を思つたのか自分の性癖を力ミングアウトである。意味が分からぬ。と言つた俺にしてみれば解る解らないでは無く解りたくない話だ。この男に羞恥心という物は無いのだろうか、と今更ながら思う。

「僕の性癖と自論を少々だ・・・・・聞こえなかつたならもう一度言つてもいいぞ?」

「結構です。といつかお前俺に言つてたのか」

そう俺が軽く驚いたようなそぶりを見せると、アブノはびしりと

擬音が付きそうな勢いで俺を指さし謎のポーズを取つて、口を開いた。

「おお嘆かわしい。もう僕との素晴らしい邂逅を忘れたといふのか輩よ」

「何処が素晴らしい邂逅だ。俺には犬の糞を踏んだよしが感じられんかったわ！・・・と言つた俺をお前と同類にするな！」

思い出すのも憚れる。もう言えるほどにこいつとの出会いは最悪だった。いや、出会い方は良く有りそうな普通の出会いだった。こいつに出会つた事が最悪だったのだ。そして俺の失態である。

「ハハハ、そう照れるなジョンよ。男のシンボルなど誰も喜ばないぞ」

「やがましいっ！・・・って俺の名前はジョンじゃねえっ！」

「こいつとの出会いは入学式まで遡る。そこで俺は、運命的とも言えなくもない出会いをこいつ果たした。いや果たしてしまったのだ。

プロローグ（後書き）

短いです。きもいです。御免なさい。

絡新婦　一（前書き）

駄文です。そして短い。おかしいですね、短いですよ。
次こそはもうと頑張り書けるよう精進します。広い心で許してください。

鬼。

それは日本人であるなら誰でも知っているであろう魑魅魍魎の代表格である存在だ。

「ふうん。んで？ 探しに行くのか、その」

桃太郎しかり、一寸法師しかり、泣いた赤おにしかり。童話や伝説、諺と言った形で現代まで語り継がれている、恐怖すべき、禁忌すべき、友愛すべき、壁を隔てた幻想側の住人。異形の化け物。

「ああ、当たり前だ。噂に聞くところ相当な美少女らしいぞ」

「お前の行動原理はそれしか無いのか・・・そんなんで大丈夫なのか？ 相手は？」

そして血を吸う鬼 吸血鬼。

「問題は無い。むしろ望む所だ。実は多少被吸血願望があつてな・・・・多少だぞ？」

「フォローになつて無いから。願望がある時点で十分だ」

西洋の鬼と言えばまず浮かぶのがそれだろ？。

異常な怪力に、体を蝙蝠や霧に変える変身能力。噛んだ相手を眷族に変える増殖性に、魅了の瞳。弱点と言えば太陽の光や流水、銀の杭やにんにくなど。

強力で恐ろしい半面様々な弱点が存在する比較的人に似た、夜の住人。モンスターと言つにはおこがましいほど高い知性を持つ人ならざる者。

「あ、そう言えれば場所は分かつてんのか？」

「ああ、勿論だ。吸血鬼を見たという美少女に案内してもれるぞ、喜べ。フフフ、透き通る様な白く美しい肌に、艶やかな紅い唇。そして鴉の濡れ羽、緑の黒髪と表現出来得るあのアジアンビューティーな長髪。ピンと伸ばされた背筋と挑発的かつ高圧的にこちらを見る黒い瞳に、思わず僕は地面に這い蹲つて上履きを舐めそつだつたよ」

「・・・そうですか」

どこの女王様だそれは。そしてマジな恍惚の表情をするな。リアクションが取りずらいだろうが。

周りではこいつの顔を見た女子どもがこそこそと話してはこやにやとしている。

お世辞ではなくこいつの顔はかなり良い。しかも普段はこいつの本性を知っている奴以外の前では猫を被つているのだ。

運動神経が良く、頭が良い上器量も良い。何処の完璧超人なのだろうかと思わず心の中でつこんでしまう、本性を知らない奴の前でだけだが。

「ああ、それでこの子が話の」

そう言って俺の後ろを指した。

そこにはなるほど、アブノ好みの美少女、いや美女と言えよう大人びた女生徒が一人、挑発的かつ高圧的な視線で俺を見ていた。

「夜近 美門。よろしくね」

「つ・・・あ、ああ、俺は」

「こいつはジョン。犬の様に使つてやってくれ。先に言つておくとコイツは真正のマゾなんだ」

俺の自己紹介を遮り、しれっとした態度で嘘を吐くアブノ。なるほど、と頷く夜近を見た瞬間、俺は何かが終わつた様な気がした。

「ジョン、お手」

「本当の犬の様に扱おうとするな!」

「あら? アブノ君は貴方を犬の様に、と」

「例えだ例え! アンタ絶対態とだろ!」

「だつて、私には貴方が犬にしか見えないもの」

「嘘吐けえ! 何処をどう見たら俺が犬に見えるんだ!」

「ねえアブノ君。この犬キヤンキヤンと喧しいわ」

「慣れてくれ。ジョンは何かと煩いからな。まあこいつはシンデレだから」

「ちょっと待てと言いたい。なぜ俺を一人して犬扱いしているのだろう。と言つか俺はこんなキャラだつただろうか。

「と言うか吸血鬼探しに行かないのか。まあ俺にしてみればこのままこの話が無くなってくれた方が何かと面倒な事が起きなさそうで助かるのだが。

あとシンデレlla。

「ふふ、確かに言葉に反して尻尾振ってるわね」

「振つてねえ！　と言つか尻尾なんて生えてねえよつ！　あれが、馬鹿には見えないとかいうそういうノリなのか？」

「あら、貴方結構メルヘンなのね？　そんな尻尾有るわけ無いじゃない。それこそ言葉の綾よ」

「もうやだこの人。言葉に悪意しか感じない」

「私の趣味は人の穴を穿つ事と、特定の人を悪意に満ちた言葉で滅多打ちにする事よ。良かつたわね、私のお眼鏡に適つて」

「そう勝ち誇る様に言つと、三割増し程サディスティックに笑みを深めた。」

恐らく夜近の田には面白そつた玩具か、美味しそつた獲物が写っているに違いない。

と言つたかお前は何様だ。

「助けてアブえもん。夜近さんが虐めるよ」

「あら、ならさしづめ貴方はのび犬ね」

「何うまい事言つてんだ！ 確かにのび太君は名前をよく間違えるけど・・・つてもう良いだろ、そろそろ話進めうよ。と言つたか進めてください」

「うふふ、貴方って実は楽しい人だったのね。てっきり没個性的な大衆の中の一人なのかと思つていたわ。今私の中の貴方の株がうなぎのぼりよ。まあ元が低すぎるから大した物じや無いけれど」

そう褒めているのか貶しているのか微妙な評価を下した後、ついてらつしゃい、と踵を返す夜近。

どうやらこのことは相当なナルシストのようだ。でなけりや余程の自信家か。まあどちらにせよ大差は無い。どちらにせよ厄介で面倒な人種なのだろう。

どうやら俺はアブノに次ぐ特異点に出会いてしまったようだ。

そんな徒な事を考えながら夜近の後ろ姿を見ていて気付いた事は、案外に悪く無いと思つてしまつている自分が居るという事だけだった。

絡新婦　一（後書き）

会話が長すぎますね。

もつと地の文が書けるよう精進します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3976i/>

変態道中夢語り

2010年10月28日00時45分発行